

標王

土佐日記

久留間璵三編纂

完



久留間瑛三編纂



標註土佐日記

版權  
所有  
浪花書房日新館出版



標註土佐日記  
久留間瑛三編  
纂  
浪花書房  
日新館出版





要訣

此の日記を貫之齋齋天宣此心書八條土佐の佐々木  
 富子の園小をたられに傳はしに御宗四條十二月廿一日  
 舟出し一京より船りしをききしに其の日記ありしに  
 日記のといふをばしに記録はしに旅の日記は次記成  
 此の旅日記をばしに記録はしに記録はしに記録はしに  
 多文のてをばしに記録はしに記録はしに記録はしに  
 所一あるを古今集の序もこと大井河行書ま  
 相まはしに記録はしに記録はしに記録はしに記録はしに  
 語をもに記録はしに記録はしに記録はしに記録はしに

○標注土左日記

一〇



多岐の地はあつたはつたを好む福に記すもあつた  
かたよふを記すは理  
そのあつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
たつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す  
あつたあつたの記すはあつたあつたを記す

此書とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の  
説とんたたを先考既白紙の説りて女朋の

略傳

貫之の傳を大日本史古今集目錄歌仙傳作者部  
類羅山文集其他卷分の抄物等に出るるをこれ  
とて大卒異同記に記す群書寮蔵本おさむるところ  
紀氏系圖は抄出也

紀氏系圖云孝元帝

彦太忍信命 屋主忍雄命

○標注土左日記

○二

武雄心命 — 武内宿祢 景行天皇三年於  
仁德天皇五年 木菟宿祢 仁德天皇  
五年 真鳥宿祢

茲寐臣 — 真咋臣 — 小臣臣 — 塩手臣 推古朝明任

大口臣 — 大人 大納言  
天智天皇十五年有  
三年 園益 從五位下 諸人

麻呂 大納言  
中務卿 猿取 從五位上 船守 從三位大納言式  
部卿  
天智天皇十五年  
四月二日薨六十二 梶長 正三位中納言  
天智天皇十五年  
三月二日薨

興道 下野守  
從四位上 本道 筑前守 望之 — 貫之

耽文 從五位上  
内藏介

女子内侍

大日本史に之文幹の子と記され御抄ふと孝元天皇の末  
武内宿祢より十一代乃苗裔たり紀本道の孫望之の  
子と之記され思案之説ふと文幹の子長各郡の甥と

可之之榮野祝ふと貫之と父文幹の子と記され  
御抄の記音ふ申ふに之説ふは子あり然きハ其之と  
法子に御殿ふ申ふとありされ人きいありあり  
其乃古之を其敬ふの由なり其乃古之を其敬ふの由  
中ノ系ハ此者より天曆の以のくあるより一法者部生  
見しあり其之を父の留と不富あり古今系目録之記  
貫之之正法ハ其任越前権少掾 御書  
所預 同七年廿七日任  
膳典務 与官道  
與相替 同十年に任内記同十三年四月任大内記同  
十七年正月七日叙後五位下同月任加賀守同十八年二  
月任美濃介延長元年任大膳物同七年九月

○標注土左日記

○三

任古京真回八条正月任土佐右天章二年三月任玄  
嘉政回八条正月叙授五位上同八条三月任木工権  
頭同九年卒云云信之又云信之の弟信之の二十  
二年卒云云信之は陽成天皇の女信之八年甲子の  
生れ也との事信之の事は久留間三郎の任より  
二年乙卯年四十八歳卒云云任強之にかる信之の  
卒の十二月卯辛

明治十六、十七、十七、七月卯旬

久留間三郎一信之

信之系出

標註上佐日記

安藝 久留間三 標註

承平四年十月廿日  
...

○標註上佐日記

承平四年十月廿日  
...

斯則適以資其民而  
以化自今以後宜以六

歲為期而後又宜長之諸國其司之其任國と云々  
又ある人の後ふつて國々に官所をおくは國内所在の高懸の土地をえ  
らびてねるるれば其土地をよつてつて便利をなれり改に上田と云々  
ありとあるがなりこの國の任所をいふとあるがなり延長八年土佐の國に  
つてあり統日本紀卷十ふ云々天平五年四月辛丑制詰國司等相代向京或替人未到以前上道或雖替不  
舟解由因法去天平三年告朝集使守己訖云云

はさしはく人しを  
らぎりたりと附注ふ  
あり

是ぞと此人と云々  
地人のゆゑある人あり  
任まらしかへるも  
薄情もよくあはれ  
私心ならに後けり  
守はにめたるも  
義理をたつるも

にさしはく人しを  
らぎりたりと附注ふ  
あり

はさしはく人しを  
らぎりたりと附注ふ  
あり

是ぞと此人と云々  
地人のゆゑある人あり  
任まらしかへるも  
薄情もよくあはれ  
私心ならに後けり  
守はにめたるも  
義理をたつるも

馬の錢うまのかねは守りてはあはれ國人の心はた  
と今にせんきあるはんはふものもそらぞ  
起せんきなるはあふりてはむ保ふりて  
はらば

ふら國人の薄情  
心のゆゑに任は  
て今に舟ふはあや  
りたさしはく人しを  
親しくせしめぬも  
がえりてある心  
ある人といひ流石  
はらそ来りたり  
あるあるのれたふりその人をかむらばはらばあり但しあふあるのさしはく人しを  
そののり助字も今も鄙さしはく人しを  
くみまらさしはく人しを  
別々まら上分下分  
れんといふことある  
で解ひ城を一文書  
にぞ小得書ふぬもの  
等がは十文字に  
てはさしはく人しを  
あるといふ不慧蓋世所謂白癡  
守の籍といふ都より下  
り来る國の守り  
その方より呼書翰

馬の錢うまのかねは守りてはあはれ國人の心はた  
と今にせんきあるはんはふものもそらぞ  
起せんきなるはあふりてはむ保ふりて  
はらば  
廿四日講抄るはれむけに  
保ふまを喜中が  
らぬものしは十文字に  
廿五日守の飯より  
ひつりて日一日  
標注土左日記  
〇二

来れりありも貫之  
の一日一夜政変  
此手あるも日傳  
しやむびうく明  
暮らつてあり  
守の貫之新任  
の國主の館は遠  
留せるも主人響  
應せしむ

我はよべきはたせ  
あらはくよと新國  
主が云ふを難難の浪  
路遠く往復するハ吾  
ひとりと思ひし猶  
不吾に似て同様難  
難せるを誰しも  
貫之ぬらも同難難

の人あり  
いんたのもありけ  
仲どかきものありけ  
まひしよんよけふる  
大津和名抄第九  
云土佐長岡郡大角  
か大津ハ大角の略  
ふん真淵云浦と  
名大海ハ入海とへ  
たてしやちる所  
ある大津より南へ二  
里不かりあり  
女子土佐在任の日  
死せしあり  
出らぬいそきをこれ  
とく旅の用の者  
あつてしやうるれ  
いも任よりたき女  
子と名をききしと  
王女の女子の死せ  
しやむびうくあり

明ふり  
廿七日 守に館を  
たふあつても唐詩  
哥はふもさうらう  
うこちをよ六から  
都出て買よあつん  
これぬる也もなん  
白妙の浪路をきく  
あつれくよ。異人  
ありて今もあつん  
貫之の邸従  
即ち史  
唐詩  
いひ  
守の館  
唐詩  
いひ  
守の館  
唐詩  
いひ  
守の館

いんたのもありけ  
仲どかきものありけ  
まひしよんよけふる  
大津和名抄第九  
云土佐長岡郡大角  
か大津ハ大角の略  
ふん真淵云浦と  
名大海ハ入海とへ  
たてしやちる所  
ある大津より南へ二  
里不かりあり  
女子土佐在任の日  
死せしあり  
出らぬいそきをこれ  
とく旅の用の者  
あつてしやうるれ  
いも任よりたき女  
子と名をききしと  
王女の女子の死せ  
しやむびうくあり

○標注土左日記

○三



くる何處もえのり  
 知りて返りあはさう  
 せしめあゆみゆたか  
 りた女子の死亡のみ  
 かあきつてあり又  
 ある人のうたやい  
 せり邪とまをせられ  
 どまもあやうやまの  
 後うらあま  
 けりたはの歌の言  
 いふあうの世に  
 存命せるまのこつ  
 い死亡せざるまの  
 八ふ何何何何  
 びて居るやと問ふ  
 鹿兒の時真淵云鹿子  
 崎と大津いふい  
 あり海子水門い果  
 あり  
 ありえいせも

ぞかゆりりわると云けるるは鹿兒の海といふは  
 守乃兄弟すこて人おれのを酒あどまをたひ  
 きき磯ありあき口のせがれをすい守のた  
 ち人くの申ははる人きんあるやうい  
 云モシ諸願モスル  
 けれおめくかくこのれがくくこの今  
 乃ちあみもる持諸  
 いのさき  
 をしと思ふ人もあまも華危乃うちもた  
 くとあまをまをせしひもはりまをい  
 くのけり人のまがりあ  
 さををいさしきれぬむらつたはれ

けの酒肴あどりて  
 之海を遊ばむと母  
 別の海をいさう  
 けりたはの歌の言  
 いふあうの世に  
 存命せるまのこつ  
 い死亡せざるまの  
 八ふ何何何何  
 びて居るやと問ふ  
 鹿兒の時真淵云鹿子  
 崎と大津いふい  
 あり海子水門い果  
 あり  
 ありえいせも

ををまよみまのれといふはくちりあ  
 けりたはの歌の言  
 いふあうの世に  
 存命せるまのこつ  
 い死亡せざるまの  
 八ふ何何何何  
 びて居るやと問ふ  
 鹿兒の時真淵云鹿子  
 崎と大津いふい  
 あり海子水門い果  
 あり  
 ありえいせも

標注土左日記

田

多の鴨のちんちん  
たつやうの吾等来ら  
ハ惜と思ふ入りやと  
すうかしく思ひ一かど  
まゝあり  
あのせし志字ハ助字  
あり  
かゝらうと古今集大歌  
所甲斐歌かひらひを  
さやももえしうけけ  
せあぐよとをうふせ  
るさやの中  
ちまらう遠き類聚云  
魯人眞公發邑清良蓋  
動梁塵  
ぞむたし列子云悲歌  
聲振林木響過行云  
言実六八上二二十二  
日ノ條二出い人あり  
極のま衡まぜも土佐  
の國人ありべし系圖  
志せし

そりききき舟よ入りけり  
廿九日大漆よまのせり醫師一ありまへし屠屠鱈  
白散酒くまへてをききうんぞうあうは似りえ  
目程回と海りな皇白散白散をある若松の海海と  
る舟やううまき一たまありこれハ海よふ船あく  
させ海よひせえのまびありぬ草も海帯も  
かゞいめらあう箇やう物多船國也宗ノモ  
おひだたお押船あ乃くちをのまをまははまあ人  
人のくちをお船あを思ふやうあんやじ日ハ  
京よまををたれいやらう九重の門に端出之  
繩乃あり船はか頭らひらうらまらひのよとをひ

屠蘇自散新越歳時記  
云正月二日長幼悉正衣  
冠以次拜賀進椒柏酒  
則屠蘇自散屠蘇  
くち一季吟云日子と  
かまて遊仙窟よくとち  
まふとありこの大年  
魚をふるまふもたハ  
めをさかけさふハ  
はまふ人々の口と  
はらふかさを吸はる  
る年魚がひらあら  
はまふとありさふハ  
らんよあり  
いかに京の儀式今日  
も如何かあるやとい  
ふあり  
屠蘇前屠蘇  
まふとありさふハ  
土ま人もあり

あへる  
二日程大うれとよや中り海師物酒贈あをせたる  
三日大月大地也地波の志を名残しむんや阿  
らんんらんともあり  
四日風ふけ得出帆帆せず昌連昌連舟下物舟下物貫之へ進上貫之へ進上  
川せりはう箇やう物多をうん人へ人へ様  
阿へいぎ海まをまを物もまままま  
きやうふれどまらふらんちん  
五日風浪やまぬをねあがととらふあり人  
孫孫とまらふ

○標庄土左日記  
○五

真淵云ふはたすと云は同い万葉は黙然をたふとまみ又まふ人をまは人ともはなりと云云塔ま  
あつとこの詞の心へ箇様の進物もくくる人まはたはあらしひりて置とこれと船中まはあし舟の後進と

おるまー様やきせりうをせじふの  
人よ心の引けるうらま

あぢう大裏式ふ云仁二年正月七日左右馬寮各壺青馬入自延明門其外諸書出

池ハ工佐園の地名ふ。下。いけとゆふ所の人の家よまじつくは物と長櫃入を了見舞よあーたるおる鯉ハあて異本鮎の字ハ作せりあぢ鮎ハいしひのとせりあぢこれま贈らむせりてあぢのをのみおくらせりていふありあぢ公事根源ふ云供若菜内藏寮あぢ内膳司より正月上の

六日暇日然る

七日ふありぬ回。漆まあり今日青馬ハあぢをうらまと思へどかしまあーたは波北あぢまらきささうゆかか。回。人乃あぢ池いけと名ある坊より鯉うろ名あてて鮎あぢら。いせり川の之海北あぢもて物も長ながじつあぢふあひはけりけおこせり若菜龍りゅうふいせりさうあぢふとまよつあぢと祭まつりわれをうらまを志まこせたる鮎あぢ飲のむみせり奇

あぢぢふ乃波なみべり。うらまをあぢあぢ池いけよつてはるあぢ茶也あぢるまをの。か。池いけと云ハは

予昨日あれを奉り寛平年中より始り伊勢物語ふ云まつきハうり梅のつくり枝えだまきまつて奉たてらるる云云云云の時代ハ草木の枝ハ鳥類つけを贈たまはらふ進物まゐりありまハ諸書しよ出

の名也よき人の男おとこは付つくさうさ任にん事じありはる櫃ひつ物ものを咎とが人ひとハあぢハあぢまふくれるを鮎あぢと云へ舟ふねまどとる後のち鮎あぢをうらまをさるる人ひとあぢのわかしは波なみさつ屋やかては問とよりあぢの里さと今いまこころごころせりきる人ひとを鮎あぢ名なあぢとてやとありいざんは人ひとうらまのんと思おもひありる水みづりけり里さとおのくいひくさ浪なみのなみなるあぢうれへいひさよある歌

新あぢと云よ志こころ浪なみ乃な存ぞんふ今いまのおくすてあらん我われやあぢんあぢとて思おもひさるる以もてあぢと云へるまゝくさるるを鮎あぢと云へるあぢのあぢんは鮎あぢをま

○標注土左日記

○六

贈る者は越へる歌  
 ちよと  
 うみまゝ舟子まを絶  
 腹へてつらふいじく  
 る様と面白く書きし  
 あり  
 今つらう今又と人  
 の口つらうとせせせ  
 なせる有へがまゝ人  
 の名を何とせらぬ  
 へーがとせられたう  
 を今思ひおとすと  
 ありちよ人のやま  
 せよ名を残りそ  
 る傍に來るは  
 せよとせられたう  
 て來るもいんせ  
 せられたうとせ  
 せよとせられたう  
 せよとせられたう  
 せよとせられたう

れうせあをせりれどもひもいへるせき  
 履き人まどこれせとあれを乃といかり物  
 をみみくひる夜更ぬはま主又やかばと  
 ちまぬた人の多れは童ハあるしとちよ  
 手は歌はくせんといふねどあきて  
 貴之詞  
 かきさうあよ見せんやいよはへくばあか  
 一といふまの時とせぬる人を待よ海  
 せよと求めく夜更ぬとよあまけん屋  
 がさよとせぬとせいよとせぬとせいよ  
 一かりとせはくといふはくといふとせ  
 ちよとせぬとせいよとせぬとせいよ

とあとかつりてあめ  
 る歌  
 初きたひあはれのか  
 ありさまのほほ  
 よつとよのほほ  
 匠くそのまのちよ  
 せらんとせ人よみの  
 せらんとせ人よみの  
 てせらんとせ人よみの  
 る大きあつとせ  
 ありとせらんとせ  
 ありとせらんとせ

行人もと海もる神の海川汀せりてあめ  
 おきりこれとあんとあんとかくとせぬとせ  
 可度  
 けせばよやあらんい思をせ世といふと  
 ちよとせぬとせいよとせぬとせいよ  
 一かりとせはくといふはくといふとせ  
 ちよとせぬとせいよとせぬとせいよ

○標注土左日記

○七



思ふまゝの歌はうま  
ふともむかしより成  
ふり味ふか  
宇多の松原ハ所さ  
かきつるを土佐の国  
うらふまへー宇田宇  
陀苑田とゆふ所を  
之れ他の國あり

思ふまゝの歌はうま  
ふともむかしより成  
ふり味ふか  
宇多の松原ハ所さ  
かきつるを土佐の国  
うらふまへー宇田宇  
陀苑田とゆふ所を  
之れ他の國あり

思ひやる心を海をこすれども又いさられを  
あつむはけりらんかつて宇多の松原をけりま  
其れ乃にけいけくまむくひく子年へつりとま  
む本づとよ浪うちよを枝こしよ勢の飛ぶお  
しよ一海とよみふたえむしよ舟人の情る歌  
みよとせば松乃うれまよむつてはあせ  
とちとけし思ふ海とあつむはけりハ情をこす  
海さしづかある枝つとよ松乃あつむく宇多  
もさぬくを夜更く西東もみよむしよ天気が  
ち梅之の心よまゆせつまのこもなつハぬい  
んぼそし海とよ女を舟とよかからきつては

めふらうハハハハハハ  
より何もあつむく  
守津保物語佳吉物語  
等よ出です漢土權  
歌款乃歌あつむ皆舟  
歌あり  
春の望みは舟歌  
たのむは舟歌  
春の望みは舟歌  
たのむは舟歌  
春の望みは舟歌  
たのむは舟歌

てきまをけりまむかへかと思へ舟子うちとつては  
おうぬうていつて何れも思へるは舟とよ歌  
春乃望みは舟歌をばあつむく己のこもなつて  
をきま、くはん、るを親やあつむらんまうと  
めあつむらん、魚、か松部の葉をこすむと成  
しよおきけり、こもなつて、海、さ、あ、お、乃  
を人乃目らふを穿て海をあらせど心はま、  
きぬ、く、け、く、く、く、く、く、く、く、く、  
人、ひ、り、た、り、め、あ、る、が、中、よ、こ、ち、  
を、り、け、り、し、よ、を、こ、す、ま、り、ぬ

○標注土左日記

○九

とや所  
うあふ必を  
佐の國の内社所名  
らん

十日那波乃と浦りよとありぬ  
同日安藝郡宇津  
十一日浦乃のつきよ舟を出しし宮浦をぬる人れ  
まぶねとせが浦のちりさよらみえげも目を  
見ても西東をな知けるか海間よとぬねを  
手あひむせいの事どもとてあまよりぬ今  
時  
まのこやいふはよきぬその船童は海の名を  
聞てまねといふ所はあはれ相のやうみやあま  
いふまぶねをさなき事の子あせば人よとてあま  
あまの女よとあまのこれをよめぬ  
はあまよ名よ宮浦まのこやうば飛げどく  
ふねへまぶねとぞいへる男も女もいふとく都

とや所  
うあふ必を  
佐の國の内社所名  
らん

とや所  
うあふ必を  
佐の國の内社所名  
らん





あづきぐゆ拾芥抄引  
世風記云正月十五日  
支時煮小豆粥為天狗  
祭庭中案上則其粥  
凝時向東方再拜長跪  
服之終身無疫氣

たより家さけあさく〜  
機嫌ヨナリ

あ〜か〜  
十五日あづきぐゆ小豆粥不煮

あ〜  
悪ナリ 藤行 舟ノハカトラヌ云

ぬる〜  
童

は〜  
善友

た〜  
風止メハ亦波止

ち〜  
善友

ひ〜

十六日風波やま〜  
同国安養部

せり〜

深時ト云明アル  
〜  
貴之  
〜  
〜

南海暖氣  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

十七日〜  
夜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

む〜  
集卷十九引

標主土立日記

〇十二

録云高麗使過海有詩  
云水鳥舟還波山雲斷  
復連時賈翁詳為指人  
聯下句云棹穿波底月  
舳艫水中天麗使嘉歎  
久之自此不復言詩云  
かつら詞林采葉抄引  
無名苑云月中桂長二  
百五十丈月輪內有之  
下有河此木秋花開云

月舟環海中天といひいぢん女ノ体裁アリりきけるふ  
里又ある人のいぢん

水底の月影人よりおぼぬ影のさきうりさ  
ももるあつな社んちれをうらまへん人又よ

影をそら浪の底なる久くはたかきおぼる  
る我をわがきこくおぼるおぼるおぼる

吹ぬ舟一御舟モトノ室津ノとんといふさかへるはる  
ふ雨ふりぬいささ

十八日松崎より松崎あけけさ

舟出さばはと海りきりきりきりきり  
おぼるおぼるおぼるおぼるおぼる  
そあはえは男とちいさな散  
らうおぼるおぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼるおぼる

破ぶり乃よるは年月をいつとも  
おぼるおぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼるおぼる

破ぶりの惠愛集い  
そよりたせしおぼる  
よたけけおぼる  
おぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼる  
おぼるおぼるおぼる

標注土左日記

〇十三

三十文字歌の二十一  
 字あるを廿七字あり  
 世の人皆よみたるを  
 笑ふとあり  
 歌のいふあひのたぬ  
 を人たよみたるはら  
 ちいしくて笑ふかほ  
 もせぬあり

ま〜きちく海やりのよめん。  
 山あり海あり雲のつと吹くがよよめり人  
 をたう歌う海ありぬるはあどもを人の何をも  
 我ある人の又字も歌うもあると此歌もある  
 文字三十文字あまり七と人これえあ〜ぞ  
 さら〜やうある歌ぬ〜  
 えあむとすねべどもえまひをばくあ〜もえ  
 よみあへ〜か〜今日がよいむか〜海  
 後日三愈解難カレシ  
 十九日 天気悪  
 月日のふれやうあせつた舟いごさげとあ人

安倍の仲たは傳録日  
 本紀古今集目錄舊  
 唐書列傳王維集其  
 他諸書は出

くうせへあ〜く〜  
 た〜日のへぬる〜  
 か〜ふせられたよび〜  
 乃歸をわ〜海の中〜  
 やうあるを〜やむ〜  
 舟よの〜  
 舟〜  
 月〜

○標注土左日記

五十一

以て... 仲丸乃ぬ... 我國ふかがる  
 歌あん神代々神を詠詠今ハ上中此人  
 もかうやうよ... 海こじもあり  
 別、... ありける歌  
 阿波... け... 日あるみり  
 ... 月... けるかの  
 國此人... け... 意味  
 ... 漢文、... け...  
 ... 解... け...  
 ... 言語... 物...

ありけ真淵云...  
 ... 又小縁...  
 ... 云心天...  
 ... 念力の届き...  
 ...

... 人... 心も...  
 ... 貴之... 人...  
 ... 月... 活...  
 ... 出... 人...  
 ... 助...  
 ... 仕...

○標注土左日記

〇十五

程ちとて前より有  
るぞと舟歌あり

くろを 和名抄羽旗部  
云鴉 妻語抄 黒色水鳥  
より

人の程よむを賊しき  
程とりて身の身分し  
しとての詞も似  
つらうかたを  
とがむるなり  
このく 古六貫之の任  
國のしるし海賊多  
めし捕りあてし  
今らゆへに海路を  
仇を報せんとて追ひ

程ちとて國のうへにやうする我父母ありと  
し思へるへらやうとてを志あるかへし  
を穿つてこぼくまよふるをいふるは  
うへにあつたをさうとせむるのまよふ浪を  
くうちよは構とりのまよふるをいふるは  
ふまらき波をよはとせむるをいふるは  
あなをせと物いふやうまよふるをいふるは  
よはしよをさむるをいふるは  
舟<sup>貴</sup>の<sup>人</sup>浪をいふるは  
しむるをいふるは  
へし海の又あをいふるは

たし申しを聞て快  
るまよ書も  
かたをいふるは  
書けるは  
かたをいふるは  
へし海賊と海上の  
あまらしとて辛苦  
を拾ふの程の年  
老しとて髪ハ七八十の  
白髪よあせり

あやき 九歳ハ  
あやきとて  
あやきとて  
あやきとて  
あやきとて

あけぬ七十年八十  
年を満りあるは  
まけり

我うとて乃雪と磯べは白浪といづせよ  
あまらしとて  
廿二日長部のとまり  
まよふるをいふるは  
まよふるをいふるは  
まよふるをいふるは  
まよふるをいふるは  
まよふるをいふるは  
まよふるをいふるは  
まよふるをいふるは

○標注土左日記

○十六

こころの事<sup>コト</sup>も夢<sup>ユメ</sup>もつ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>海<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>碇<sup>てい</sup>たり<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>や<sup>や</sup>あ<sup>あ</sup>みの<sup>み</sup>花<sup>はな</sup>を<sup>を</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>  
能<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>免<sup>めん</sup>れ<sup>れ</sup>

波<sup>なみ</sup>と<sup>と</sup>能<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>夢<sup>ユメ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>海<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>

女<sup>メ</sup>三日<sup>ミツ</sup>日照<sup>ヒヨク</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>は<sup>は</sup>海<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>  
何<sup>なに</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>を<sup>を</sup>神<sup>かみ</sup>佛<sup>ほとけ</sup>を<sup>を</sup>祈<sup>いの</sup>る<sup>る</sup>

女<sup>メ</sup>四<sup>ヨ</sup>日<sup>ニチ</sup>知<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>海<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>

女<sup>メ</sup>五<sup>イ</sup>日<sup>ニチ</sup>楫<sup>は</sup>より<sup>より</sup>舟<sup>ふね</sup>に<sup>に</sup>風<sup>かぜ</sup>悪<sup>あく</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>を<sup>を</sup>舟<sup>ふね</sup>出<sup>で</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>

女<sup>メ</sup>六<sup>ロク</sup>日<sup>ニチ</sup>酒<sup>さけ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>海<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>

手向陸<sup>テムケ</sup>より舟路<sup>フネミチ</sup>  
より道の神<sup>ミチノカミ</sup>は慈<sup>あま</sup>か  
き様<sup>さま</sup>より祈<sup>いの</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>

目<sup>め</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>蒼<sup>あお</sup>海<sup>うみ</sup>より  
ち<sup>ち</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>道<sup>みち</sup>觸<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>か  
ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>道<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>神<sup>かみ</sup>  
より

夜<sup>よ</sup>半<sup>はん</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>  
手向<sup>テムケ</sup>より舟路<sup>フネミチ</sup>  
より道の神<sup>ミチノカミ</sup>は慈<sup>あま</sup>か  
き様<sup>さま</sup>より祈<sup>いの</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>

の<sup>の</sup>道<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>神<sup>かみ</sup>  
より舟路<sup>フネミチ</sup>  
より道の神<sup>ミチノカミ</sup>は慈<sup>あま</sup>か  
き様<sup>さま</sup>より祈<sup>いの</sup>る<sup>る</sup>人<sup>びと</sup>

ていけ 天氣の事よつ  
けつ 天氣よか  
か 祈る心より

同をのぞめを晋明帝  
紀名紹元帝開紹元舉  
頭見日不見長安元帝  
益奇之云云

と返るよは中よ漢路のたうねんといふ人の  
うめうめ  
遊うが能吹ぬる時夢行舟のたうねん  
と天にけのこま  
はあつていけ  
廿七日風吹ちて舟をたぶ舟出さばされ  
たか 痛くあげく男たち心あぐさめよ  
か 詩 小回をのぞめを都のともを遠く  
あつてのさほを多るある女のよめる歌  
日さすよあちをちうくみる物を都へ  
ありよ及のさけさ又ある人のうめ

つらき 漢土よ  
弾指と書き又弾の一  
字よつよつよつよ  
の心より屈平漁父辞  
云吾聞之新沐者必彈  
冠云又管仲論云三子  
難易者可彈冠而  
相慶云云よつよつよ  
うとすく或いはいよ  
か 思ふよきか其  
けがれをつはつてし  
て散らしてよむ心  
爪 簾中抄けめよ  
日手此爪丑寅足の爪  
寅午よ日本紀纂疏  
上云凡陰陽家丑日除  
手甲寅日除足甲為吉  
子の日管家文章卷六  
云予亦嘗聞于故老曰  
上陽子日野遊厭老其

○標注土左日記

○十八

吹のぎのたえぬうぎ星一まをせは波路ハ  
日教 難計 けうりあり日一日風せまげつよ  
しきをーとねぬ  
廿八日終夜るやまげね  
廿九日舟出さけうらうらうと思りてこねけつ  
めつとねぐくちまよしうてて目さのぞふせ  
ちりふ夢子の日ありきつてまきくを腫月ふ  
れは京終子乃日の幸いひ出さ小ねもがれと  
いふと海中ふせを夢かこつて 阿る女の書  
いづこさるうめ  
おむつうあああち子能日う海士あうばうみ  
鳥登戸

事如何其義如何倚松  
 樹以摩腰習風霜之難  
 犯也和菜美而吸也期  
 氣味之克調也云云子  
 日のちり諸書よ出い  
 里くく略も叔子の日  
 八此月五月初子も十七  
 日中子あも何の  
 引ちくし今も廿九  
 日乙の子の日ハドめ子  
 日のちりあも今日も  
 海路をりや春暖た  
 候もつ瓜もきり心地  
 りせふちりやあも子  
 の日を思ひいんら  
 ありて  
 うみ松和名抄海菜類  
 云海松雀禹錫食經云  
 水松状如松而無葉  
 美揚氏漢語抄云海松  
 和名同  
 土俗用  
 菜古今集春上よみ

松をふよひのあり 物さそぢりて海をて子  
 此日のうらまゝも 不悪ノ意  
 るうら  
 子日  
 ちりあも何の  
 引ちくし今も廿九  
 日乙の子の日ハドめ子  
 日のちりあも今日も  
 海路をりや春暖た  
 候もつ瓜もきり心地  
 りせふちりやあも子  
 の日を思ひいんら  
 ありて  
 うみ松和名抄海菜類  
 云海松雀禹錫食經云  
 水松状如松而無葉  
 美揚氏漢語抄云海松  
 和名同  
 土俗用  
 菜古今集春上よみ

人あしを春日野の  
 お日のせをりいんら  
 くとやうあもてこの  
 菜つらん  
 土佐の泊り考證云土  
 佐の泊和名松よ土佐  
 郡土佐と云所云た  
 せと上よもて安藝  
 郡の地名云た  
 土佐郡の安藝郡より  
 西の方あれは  
 佐の國の地圖を考  
 へたるあり云  
 田舎川と和泉あり

年比をまみ ともろり名も あへなき  
 る  
 世日る風うの海賊を せざれ  
 了夜半をありは舟を中へ 河波の深淵を渡  
 夜中やせは西ひんが みるを男女  
 神仏を以のりて 木門  
 ぼりりや奴島と 田舎川と  
 とる海を海るか 和泉の灘と  
 空をよはりぬ 今日海は波よ 佛のめぐむ恒  
 りりやせぶ 三十日あり九日ふあり

○標注土左日記

○十九



けり今も和泉の國より舟ぬせを海賊地  
那らば

二月朝日朝の間雨ふり午時を切りよやぬ

世を和泉の灘とよふと後より出たては

海の上昨日のさくくは風波をえむと

原をへりりところを名をくろくね

まゝいその波を雪のさくくは白く貝の色ハ

藤橋のさくくは今一色をさくくは

りく新居の浦とよふと海より

玉くげをさくくはうらみたぬきうみ

和名抄舟具云岸  
紋音支 挽船繩也  
玉くげ 玉匣と書く  
箱と云枕詞

和名抄舟具云岸  
紋音支 挽船繩也  
玉くげ 玉匣と書く  
箱と云枕詞

かぐえとくせりきん又ふあまはいし月

まかありぬるさくくは

さくくは人小の事とく心やうよ

おと多のほさくくは乃をさくくは

日五十日まがこれる

うちがたがみかた

のさくくは

ゆきを証とく

波たのけ

二日雨風やま

三日海のう

○標庄土左日記

○二十

一  
 伊勢物語よむ  
 甲の海  
 乙の海  
 丙の海  
 丁の海  
 戊の海  
 己の海  
 庚の海  
 辛の海  
 壬の海  
 癸の海  
 子  
 丑  
 寅  
 卯  
 辰  
 巳  
 午  
 未  
 申  
 酉  
 戌  
 亥  
 子  
 丑  
 寅  
 卯  
 辰  
 巳  
 午  
 未  
 申  
 酉  
 戌  
 亥

乃ふくもやまをまきし時ありとちひるる  
 時にはしるるまにあり  
 時をよりてこゝろあきとれちあつり海  
 玉をぬりぬありとるかてりりいんたぬ  
 四日おちとまけし風の雪のきふまこれら  
 何とこもむし海にあらぬあつたぬ  
 日よ波風あはれよかちとり日ぬえをうい  
 ぬいあつたりとるにれあつたり海よりき  
 くのうはしき貝石あたねりかこれ  
 ときむの一人をのちつた舟ある人の海  
 よきし波うちもあつた我とある人これ

一  
 伊勢物語よむ  
 甲の海  
 乙の海  
 丙の海  
 丁の海  
 戊の海  
 己の海  
 庚の海  
 辛の海  
 壬の海  
 癸の海  
 子  
 丑  
 寅  
 卯  
 辰  
 巳  
 午  
 未  
 申  
 酉  
 戌  
 亥  
 子  
 丑  
 寅  
 卯  
 辰  
 巳  
 午  
 未  
 申  
 酉  
 戌  
 亥

貝ありしをちんといへせつある人の海  
 舟にあらなりよとある  
 日ぬえの海にあらぬあつたぬ  
 死子 類 美 謔  
 こころちよかりきたりやあうもあつた  
 ぬいあつたりとるにれあつたり海よりき  
 くのうはしき貝石あたねりかこれ  
 ときむの一人をのちつた舟ある人の海  
 よきし波うちもあつた我とある人これ

○標注上左日記

万葉集... 歌...  
 五...  
 泉... 故...  
 松原...  
 麻...  
 松原...  
 松原...

五日...  
 乃浦...  
 舟...  
 御舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...

舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...

舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...  
 舟...

○標注土左日記

○二十二

我をへよりりたる位  
 吉の松をとりよるも  
 此のあやしむは今も  
 せよこれのまはれり  
 せよまうまうけせ  
 本日か身のせよと思  
 ひまのめいせり  
 ちよむつ一人の母  
 たる在國の時うせり  
 ち女子のまは母日の  
 かこまはれりせり  
 せよこれのまはれり  
 日せれまはれり  
 日せれ草とまはれり  
 を忘れたとまはれり  
 まはれり  
 ちちのまはれり  
 の神とまはれり  
 雨義ありつるまは  
 き物ありつる時か

今もまはれり  
 母はまはれり  
 任のまはれり  
 里やまはれり  
 あんとまはれり  
 めまはれり  
 誦つるまはれり  
 まりへまはれり  
 めはまはれり  
 るまはれり  
 名まはれり

波風をわたり  
 ふとあり又靈のまは  
 心をまはれり  
 心を奉幣  
 真淵云何の神  
 りまはれり  
 まはれり  
 ちまはれり

いまめくまはれり  
 よまはれり  
 こまはれり  
 此まはれり  
 ちまはれり  
 とまはれり  
 以まはれり  
 あまはれり  
 うまはれり  
 かまはれり  
 ちまはれり

○標庄土左日記

〇二十三

あまの季吟云あ  
まの島の巨子の前  
にあまの人の名もあ  
まの一人あまの故  
まの舟砕くはかく  
あまの事

見 江此忘 夢さし  
 乃 助字 眼 助字 眼  
 うつ 神 乃 神の心を 神 乃 神の心を  
 の心を 神 乃 神の心を  
 六日 みを 神 乃 神の心を  
 を 神 乃 神の心を  
 能 神 乃 神の心を  
 かの 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 里 神 乃 神の心を  
 げ 神 乃 神の心を  
 い 神 乃 神の心を

云 昨日の 條の 淡路の  
 巨子の 歌を つけんと  
 やうの 事ハ ありと せ  
 らむと せむ

舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 七 日 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 の 水 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 た 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 け 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の  
 舟 砕の 舟 砕の 舟 砕の

此考證云云を女  
を称して御とらうを  
ハ大和物語は伊勢の  
こそ若狭のごとけの云  
ふとあり此外あげて  
かぶるべしと云ふ女  
の称あり

東にききしハ川の堰江に水を流し舟を家  
身もあづむりしは是もやまのいをせしれ  
よもなるちかき一舟よるに飽れを今し  
わくともありし舟もあまのいよ水忠  
吾が心浅ト水ノ淺トニカケル  
あはれあきれたるは経路を京ちのくあり  
ぬるよるにびよたむし一舟いよるよるに  
路のごとくあよるを里路をいよるに  
舟をよるにや一舟いよるよるに  
八日あはれ河の舟ありしは津國島下郡  
いよるよるにや一舟いよるよるに  
ありしは河の舟ありしは津國島下郡  
いよるよるにや一舟いよるよるに  
ありしは河の舟ありしは津國島下郡

證云云契沖入江昌喜  
多との説のぶしは  
けぬぬり舟をいよ  
けぬぬり舟をいよ  
みを心得へきよ心  
りよるよるにや一舟いよるよるに  
を夜に明けぬよう舟  
あはれ考證云云の  
詞心得か〜同書よ  
ハ村のよあはれの所  
云々李吟云あはれの所  
よ道ゆ〜人のゆき

九日ハ舟をよるにや一舟いよるよるに  
世に川の水ありしは津國島下郡  
津國島下郡今ハ大和田ト云ナリ  
有東魚もよるにや一舟いよるよるに  
河の流しは舟をよるにや一舟いよるよるに  
やまのいよるにや一舟いよるよるに  
あはれ考證云云の  
詞心得か〜同書よ  
ハ村のよあはれの所  
云々李吟云あはれの所  
よ道ゆ〜人のゆき

○標注土左日記

○二十五

一本贖の所よふあが  
 せあかふ假名う似し  
 るを見てもふひて文  
 字をかへしう米魚  
 ちかきふ所とい  
 こふてたて  
 汀の院ハ河内國交野  
 郡河内志云交野郡  
 波瀲院諸  
 古今集目錄云惟高  
 親王文德天皇第一皇  
 子母從四位上紀靜子  
 從四位下名席女四位  
 宮内卿天安二年正月  
 廿三日任太宰権帥同  
 貞觀十四年七月出家  
 十五年二月廿日薨号  
 小野宮云大日本史  
 云寛平九年二月薨時  
 年五十四古今集春上  
 ふきとの院よて

梅花さけりあまよ人のいそぐこれありの名  
 たりきあえしとあらあり故惟高の御子  
 此のよは故在原業平此中好の世中よ  
 梅のさのざりば春のち後ちのどけの  
 一とゆふ影よめるほありと里今興ある人  
 活よあまよふあま  
 ち世へしとわたりハちせどひしへのこゑの  
凄然清ノ院ノ荒廢  
 さむさむかきしとまけり又ある人のよめる  
 天意の世をふる宿の梅花むしれあま  
 程よあまはとゆふつとよ京北越づるを  
 るびはよるかのあま人の中よあま

を見てある在原業  
 平朝臣よ此ふた  
 えて櫻のちかりせを  
 春のちる北のどけ  
 かしす伊勢物語云  
 むり惟高のこし申  
 ささあひすけ  
 山ささあひすけ  
 宮ありけりしとま  
 の櫻の花ざかりよ  
 とは宮よあま  
 ありける

下三時よは人子もあつりきいし  
 國よそを子生るをたどもありあへるこれ人舟  
 乃とほるほよるねいさつありのけりはあま  
 をみさむの母子の母りねきよあま  
 ありのりもありつと人の子をあま  
 ちちをさくさくあま  
 乃むもあまあま  
 我朝  
 十日さなる事ありそのほり

○標注土左日記

○二十六





小櫃 季吟云山崎の小櫃のふらふら任國よおをちきなやふ時見置たふふ物どもあふべしちいさきひつし繪をかきし在家の賣物のまふしあふべし

和名抄飯餅類

云標辨文選云膏標粧標音選粧揚氏漢語抄云標餅和名萬加利

天竺はつらつりつらち土佐の國よりつら

とていふあるかきこゝへ行はぬ坂まよふ人あり  
 志らうらねらばしあふゆゑにわさきありま  
 イヤし時より冬く時を人まよかひりけ  
 これももさきももるなり花よあふふこ  
 よるゆんと思ひばきだもせぬ様は月  
 山城野郎  
 大和國 紀伊郡 湯  
 川 飛騨河をそへばふち流さくよか  
 らざりし里と心もあふ人のよめ  
 瓢箪  
 久うは月よあふむ桂川底ふる影も  
 らざりし里と心もあふ人のよめ  
 天竺はつらつりつらち土佐の國よりつら

もるかと思ひ桂川はつらつりつらち土佐の國よりつら

る海りぬる水又河人の思ふ  
 桂川 吾心よもかよもあふふ人の思ふ  
 流るべらあり京のうきもあふりよ歌もあ  
 やりきあわゆるねあふる人きだゆも見  
 えは来よ入もそられ一家よさうり門よ  
 入よ月時をたふゆとありさ流るあまし  
 里をあふしあふふもあふふおづれ  
 家をあづけしうはる人の心もあふるあ  
 中垣まねははるあふのやうあふふの  
 あづうねるありされをたより  
 給料  
 元來隣家ノ主人業ヨリ懸望シテ頭ル  
 便宜アル  
 從者罵ルヲ傳ム  
 吾心秋心深

○標注土左日記

○二十八

七世<sup>行中</sup>の<sup>慈氣</sup>の<sup>返</sup>はせんは  
昔無キ処ニ池四ノ自然ニ池ヲ作ス荒ルガナリ  
 池<sup>シ</sup>の<sup>潘</sup>ありあり  
 ねもあまき<sup>女</sup>年<sup>六</sup>年<sup>の</sup>う<sup>ち</sup>ま<sup>の</sup>子<sup>年</sup>也  
 よけん<sup>の</sup>校<sup>の</sup>あり<sup>ま</sup>る<sup>今</sup>あ<sup>ひ</sup>ま<sup>の</sup>  
 中<sup>ド</sup>の<sup>大</sup>い<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>た<sup>れ</sup>が<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>  
 人<sup>々</sup>の<sup>思</sup>ひ<sup>出</sup>ぬ<sup>り</sup>も<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>  
斯ク荒ニツキ物事思出ル  
 ち<sup>の</sup>家<sup>の</sup>う<sup>ま</sup>の<sup>女</sup>児<sup>の</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>  
 ら<sup>福</sup>を<sup>い</sup>の<sup>が</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>身</sup>人<sup>も</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>子</sup>  
 ね<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>か</sup>ほ<sup>り</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>か</sup>ほ<sup>り</sup>  
共ニ讀  
 心<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>ふ</sup>ん<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>人</sup>  
 生<sup>れ</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>物</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>

るをみるがかあーさー  
 阿<sup>の</sup>舞<sup>又</sup>あ<sup>ん</sup>  
失セシ女子  
 見<sup>人</sup>を<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>子<sup>年</sup>よ<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>  
如クニ見ラレモノナラバ  
 か<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>  
盡サズ  
 一<sup>き</sup>の<sup>あ</sup>ま<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>  
疾 破 棄ン 他見ヲ耻ル心  
 海<sup>を</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>あ</sup>

明治十六年十二月十九日版權免許  
全十七年三月五日刻成

編纂人

廣島縣平民

久留間 璵三

廣島區竹屋村平塚町十三番地

出版人

大阪府平民

塩冶 芳兵衛

東區北渡邊町四十六番地

發兌 書林

大阪 同 同 東京 西京

松村 九兵衛  
森本 專助  
柳原 喜兵衛  
吉川 半七  
佐々木 惣四郎



